故郷そして両親への思い

阿部仲麻呂の「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」は、『古今集』に収録されている。この歌は、仲麻呂が帰朝を迎えて唐土の明州（浙江省寧波）の送別の宴で作ったといわれる。

歌の語句に注目してみると、「天の原ふりさけ見れば」は『万葉集』の早い時期から末期まで及んで、常套的に詠まれた語句である。『万葉集』では挽歌に使われたり、または「ふりさけ見る」視線の先には望ましい景が展望されているのが通例である。下二句の三笠の山に出る月も『万葉集』にすでに詠まれており、古くから奈良の人を魅了する景色であった。異国で月を仰ぎ見れば、自ずと望郷の思いが湧いてくる。奈良の三笠山に出る月はその思いを集約した表現であり、漢語ではなく和語でしか表現できない故国の風景だったのである。

「月」は時間や空間の隔絶を越えて、眺める人を一つに結ぶ特性がある。だから、中国の詩人は異郷で月を眺めて故郷を偲ぶ詩をたくさん詠んでいる。仲麻呂の歌は漢詩的な発想と万葉の伝統の表現とを融合した、和漢折衷の作であるといえる。

この和歌は、中国では未だに訳者は判らないが、「翹首望東天　神馳奈良辺　三笠山頂上　思又皎月圓」という五言絶句の漢詩に訳されて知られており、かつてはこれを唐詩と勘違いする人もいた。現在詩を刻んだ詩碑が陝西省西安市興慶宮公園と江蘇省鎮江の北固山に建てられているという。

仲麻呂はかつて親の年老いたことを理由に帰国を上請したが、許されず「慕義名空在　輸忠孝不全　報恩無幾日　帰国定何年」という漢詩を賦している。故郷を離れて親に孝行を尽くすことができないことを何よりも無念に思ったのである。儒教では「孝」とは父母から受けた身體髪膚を傷つけないことから始まり、身を立て道を行い、名を後世に揚げて父母を顕すことに終わるという。仲麻呂は大唐帝国の難関の科挙に合格して（唐の科挙に合格した留学生は阿倍仲麻呂と新羅の崔致遠だけと言われる）仕官し、名を後世に永く伝えることで、見事に「孝」を果たした。

私が初めて覚えた日本の歴史上の人物が阿倍仲麻呂であった。仲麻呂に対する崇敬の心は昔も今も変わらない。日本に来て十三年、鈍才の私はやっと研究者として出発したところだ。この度三月末を以て研究所を退職するが、これからも日本のどこかで研究者として頑張っていきたいと思う。

（万葉古代学研究所主任研究員・曹咏梅）

桜井市 安倍文殊院の仲麻呂歌碑